

シュムペーター『帝国主義の社会学』

三つの特性「(1) 根本的には戦争と征服を生みだす慢性的傾向があり、それは健全な功利目的によらない不合理な膨張をもたらすことがまれではない。(2) こうした衝動は人間にとって生得的なものではない。それらは、絶滅を避けるために諸民族、諸階級が戦士につくりかえられた頃の死活的経験から生じた。しかし、戦士の心性や戦士階級の利害は存続し、戦争や征服が不可欠でなくなったのちも諸事件に影響をおよぼしている。(3) 戦争と征服への趨勢は、支配階級の国内的利害によって、しばしば戦争からもっとも多くの経済的・社会的利益をえる諸個人の指導のもとで、維持され規定される。もしこれらの要因さえなければ、帝国主義は資本主義社会が成熟するにつれて歴史のゴミ箱のなかに捨て去られようと、シュムペーターは考えた。というのは、もっとも純粋な形態における資本主義は帝国主義とは正反対のものだからである。つまり、平和と自由貿易のもとでこそ、資本主義はもっ

とも繁栄するからである。しかし資本主義のもつ本質的に平和的な性格にもかかわらず、暴力による外国征服から利益をえる権益集団があらわれる。独占資本主義のもとでの大銀行とカルテルの融合は、利潤拡大のために植民地や保護領の排他的支配を求める強力で有力な社会集団を生みだすのである。」(48)

新植民地主義

「近代帝国主義は植民地主義ぬきでも存立しえたはずだといえは誤りとなろう。しかも、植民地主義の終焉はけっして帝国主義の終焉を意味しない。この逆説のようにみえることを説明するとすれば、つぎのようになる。すなわち、軍事的政治的強権の直接的適用という意味での植民地主義は、中枢的中心部の必要にあわせて多くの従属諸国の社会的経済的機構を再編するためには不可欠であった。いったんこの再編諸力——国際価格、マーケティング、金融システム——そのもので十分である。このような環境のもとでは、なん

ら本質的な変更もなしに、またもともと植民地獲得に導いた諸權益を重大に損なうことなしに、植民地に形式的な政治的独立が与えられることも可能となろう。」

(144)

「帝国主義、とくに植民地なき帝国主義を十便に理解するうえで主たる障害のひとつに、国際的経済関係とは、植民地主義と、帝国主義の総体的で複雑な歴史によって押しつけられた社会変動の結果であるといった評価の欠如がある。このような社会変動は、生産と貿易のみならず、階級構造、政治、そして（最後に、しかし最小ではなく）直接的・間接的に外国の統治に従属していた長い歴史をもつ人民の社会心理にもまた関連しているのである。」(164)